

2017年度 総合評価方式 講評

立命館アジア太平洋大学

■第1次選考（書類審査・筆記試験）

第1次選考では出願書類および筆記試験（小論文試験）による審査を行い、それらの結果を総合して第1次選考合格者を決定しました。

1. 選考内容と評価ポイント

（1）書類審査

出願時に提出された「学士課程入学願書」、「調査書」、「志望理由書」等に基づいて、高等学校での教科学習の達成度、志望学部に関連する事象への興味・関心、学修への意欲・熱意を中心に評価しました。

（2）言語能力

言語能力は、本入試方式においてはその能力の有無が合否に直結することはありませんが、英語資格・スコア等確認できる場合には、入学後の英語教育との接続を考慮し一定の水準を越えた資格等級・スコアを加点対象としました。

ただし、英語資格・スコアがない受験生であっても、志望理由書において具体的な学修計画（語学学習に限らない）と学びに対する意欲が表現されているものは高い評価を得ることができました。

（3）筆記試験（小論文試験）

総合評価方式の小論文試験はいわゆる「課題文読解型」で、両学部共通の課題文と設問を提示しました（試験時間は90分）。特定の分野やトピックに関する受験者の知識量を問うのではなく、課題文を読み解く力、筆者の考えなどを要約する力、自らの見解について述べ論理的に文章を構成する力などを評価しました。

設問は、課題文の内容理解度を問うもの2～3問を設定し、150字から350字以内で回答する問題に加え、受験生自身の論を展開する問題や筆者の論考について自分自身の経験を通じて説明することを求めた問題を1問設定し、750字以内で回答することを求めました。

2. 第1次選考 講評

（1）書類審査

志望理由書は、設問の求めに対しておおむね的確に答えたものが多くを占めました。中でも、自らの将来像と、本学の特徴や志望学部の学修領域とを適切に結びつけた上、入学後の学修計画を展開した記述が見られ、知的な興味・関心の強さ、成長への意欲を感じさせるも

のを高く評価しました。その一方で、抽象的表現に終始して学びたいことや興味・関心を具体的に述べられていないものや、本学における成長や学びの価値を表現できていないもの、関心のあるトピックについて自分自身の意見が十分には表現されておらず、昨今メディアで報道されている事実関係を述べるにとどまったものが散見され、それらはおおむね低い評価となりました。

また、英語資格・スコアを有している受験生のうち、言語能力を基盤として入学後の学びでどのように成長するのかについて、意欲や計画性が認められない場合は高い評価を得られないものもありました。

高校等での教科学習の成果については、調査書等にもとづき総合的に評価しました。全教科の評定平均値および個別教科・科目（英語、国語等）の評定値等に基づいて総合的に評価しました。

（２）筆記試験（小論文試験）

課題文は決して難解なものではなく、多くの解答からは、日ごろ様々な文章に接し、また、自分の論を矛盾無く展開する訓練を積んだことが窺えました。

内容理解度を問う設問に対しては、課題文の要旨を踏まえた適切な解答が多くを占めました。設問の意図への理解が不十分なものや、重要ポイントの見落とし、基礎的な文章表現上の誤り、誤字・脱字が散見され、それらは減点対象としました。

受験者自身の論を展開することを求めた設問や、筆者の論考について自分自身の経験を通して説明することを求めた設問においては、設問の求めに正しく応えられていない解答や、自らの考えを論理的に展開できていない解答、課題文に示された論を踏まえずに展開されている解答が少なくありませんでした。また解答が指定文字数の 7 割程度未満である場合や、適切に段落が設けられていない解答、誤字・脱字、その他言語表現上の誤りも散見され、それらは減点対象としました。

■第 2 次選考（面接）

1. 選考内容と評価ポイント

第 1 次選考合格者を対象に個人面接（受験者 1 名に対し複数名の面接者による）を実施しました。時間は 15 分程度で、入学後の学修や正課外活動を含む学生生活への意欲や適性を中心に、質疑に対する応答の的確さや論理展開力などを評価しました。

2. 第 2 次選考 講評

大学入学後の学修や学生生活の展望を力強くアピールする受験者が多数を占め、本学の多文化・多言語の環境、多様性のある学生構成などを積極的に活用する強い意欲が感じられました。

しかし一方で、志望学部の学修に対する興味・関心や、入学後の学修計画について具体的

に述べられない受験者や、これまでの学習や経験を大学入学後にどのように発展させていくかを的確に説明できない受験者などが散見されました。

また、志望動機や入学後の展望などに関する一般的な質問に対して、的確に答えられるようあらかじめ回答を準備してきた受験者が多数でした。準備して面接に臨むことは大切なことであり、そのこと自体が評価を低めることはありませんが、準備してきたままの簡潔さを欠く回答や、具体性を欠く回答などは低い評価となりました。

質疑の中には、興味・関心のある社会事象や国際問題等を受験者に挙げさせ、それに対する受験者自身の考えを述べさせる場合があり、その考えに対してさらに質疑応答を繰り返すなどして、受験者の自ら思考する力や、的確に説明する力などを評価しました。日頃から新聞や社会事象に関する書籍に触れるなどして広く社会に目を向け、様々な事象に対して知的関心を寄せる習慣がある受験者や、様々な活動に関わるなどして他者と交わる機会を積極的に得ている受験者はおしなべて問題意識やコミュニケーション能力が高く、良い評価を得る結果となりました。

以上